ともにつなぐ　ヒロシマの記憶

半田市立乙川中学校　２年　新美　雄也

１　戦争の悲惨さを最も感じたもの

原爆ドームや原爆資料館を見学し、戦争の残酷さを実感しました。その中で最も悲惨に感じたものは原爆の熱線の影響で中身が炭化したお弁当箱です。これは、当時建物疎開作業中だった中学1 年生の少年が持っていたもので、中身を食べることなく亡くなってしまいました。初めて見た時、少年が辛い戦争の暮らしの中、毎日を懸命に生きる姿や、そのお弁当を楽しみにしている様子が頭に浮かびました。このような当たり前にある日常を一瞬で跡形もなく消し去ってしまうのが原爆の恐ろしさなのだと深く感じました。

２　最も復旧・復興を感じたもの

私が最も復興を感じたのは、原爆投下直後と現在の広島市内を比較した時です。投下直後の広島は建物が粉々に破壊され、見渡す限り黒焦げの焼け野原でした。しかし現在では、周りを見渡せばビルなどの大きな建物が広がり、活気あふれる豊かな街となっています。

かつて「今後 75 年は草木が生えない」と言われた広島が緑豊かな街となり、見事な街を再生させ、平和について訴え続ける姿に大きな復興の歩みを感じました。

３　新井さんからのお話を聞いて

ドームや資料館を見学した後、実際に被爆された方のお話を聞かせていただきました。当時中学一年生だった新井さんは、伝令を受け市内へ向かう途中に閃光を見たといいます。やっとの思いで辿り着くと、そこには地獄のような光景が広がり、水を求めて彷徨う人々であふれていたそうです。新井さんは投下後に市内に入ったため、間接被爆をされました。そのため、これまで7 度の癌を患い現在も闘病中ですが、手術は受けられず「かろうじて話をしている」と話されました。これほど時間が経っているにも関わらず、一生を苦しめる原爆の恐ろしさと「2 度とこのようなことを繰り返してはいけない」と言う強い思いを受け取りました。

４　未来へ渡し続ける、記憶のバトン

今、世界では 12000 発以上の核弾頭が保有され、戦争や紛争が行われている地域が多くあります。そこで、一人一人が「平和」とは何か考え、意識を持つことが平和な世界を作る第一歩となるはずです。新井さんはお話の最後に「君たちにバトンは渡したよ」と仰いました。今を生きる私たちは、あの時何があったのか、どんなことがあったのかを学び、生き抜いた人々の記憶を未来へ伝え続けていく必要がある、と強く思いました。